

### 3 夏季研修④

## 南相馬市小高区

#### ■はじめに

私たち災害対策研究班は、平成28年9月7日に夏季研修で小高区（福島県南相馬市）を訪れた。小高区は2016年7月12日に避難指示解除準備区域が解除され、今後大きな変化が見込まれることから研修地の対象とした。大きな堤防が造られていたり、建物の基礎が無くなっていたりと少しずつだが復興が進んでいると感じたが、依然として人が住める状況ではないと感じた。



#### ■震災による小高区への影響

1. 人口
2. 避難状況
3. 公共交通機関
4. 教育
5. 医療・福祉

に分けて考察していく。

#### ◇1. 人口

小高区の人口は12842人（震災前）から800人（平成28年9月8日時点）と約6%にまで減っている。5年以上経った現在でも人が戻ってきていない原因は、小高区が福島第一原発から20km圏内に位置するために、避難解除が遅かったことだ。このことが復興計画が妨げられている大きな要因である。

#### ◇2. 避難状況

小高区は現在も（平成28年9月12日）、一部が帰還困難区域に指定されている。南相馬市内では、小高区と原町区の南側一部（約107km<sup>2</sup>）が20km圏内の警戒区域、残りの原町区と鹿島区の一部（約181km<sup>2</sup>）が30km圏内の計画的避難区域及び緊急時避難準備区域、残りの鹿島区（約111km<sup>2</sup>）が30km圏内になっている。

福島第一原子力発電所の事故を受け、南相馬市はバスでの集団避難や自主避難により、多くの区民が避難した。その後は、自主的な避難が続いた。そして現在では、避難指示解除準備区域が解除されたことから、住民が少しずつ戻ってきている。住民が戻ることで、徐々にではあるが復興は進んでいると感じた。

#### ◇3. 交通機関

現在JR常磐線（原ノ町ー相馬間、小高一原ノ町間）、JR東日本の原ノ町ー竜田間代行バスの運行は開始済みである。さらに市内仮設住宅と旧警戒区域間を往復する無料ジャンボタクシー、（株）さくら観光（南相馬ー東京方面高速バス）の運行も開始している。

通行が再開することは、復興していく上でとても重要である。アクセスが良いことで、ボランティアや作業員、物資の移動が容易になる。現在6号線は浪江～富岡間で出勤、退勤時間に渋滞が頻発している傾向があり、バイパスを新しく建設すれば、その渋滞の緩和に繋がる。しかし、その時間帯以外の使用を見込むことができない。震災前には、常磐自動車道に小高インターチェンジが開設される計画が平成20年度県に申し入れがなされており、震災前から道路の必要性を住民は感じていた。震災後の2015年11月17日に桜井南相馬市長と高木副産相の会談が行われ、常磐道の避難指示解除準備区域が解除小高インターチェンジ設置と4車線化の案が手渡された。



#### ◇4. 教育

幼稚園等：公立幼稚園4園、私立幼稚園1園、保育所1箇所はいずれも休園中。

小学校：小高、金房、鳩原、福浦小学校は鹿島中学校仮設校舎にて再開済。

中学校：小高中学校は鹿島小学校仮設校舎にて再開済。

高等学校：小高工業高校は市サッカー場敷地内仮設校舎で再開済。小高商業高校は原町高校敷地内仮設校舎で再開済。

上記の通り、幼稚園等はいずれも休園中であり、小学校・中学校・高校は仮設校舎という形で再開済みである。しかし幼稚園・保育園は再開していない。それは、幼稚園のコミュニティは再編が容易なことに起因するだろう。よって、人間関係や通園の点からも必ずしも決まった土地である必要はなく、避難先でも充分通うことができると考える。また、小学校・中学校・高校は再開しているとはいえ、グラウンドをはじめとする活動施設が充分でないこと等が課題である。

#### ◇5. 医療・福祉

医療施設：市立小高病院、小高病院、市立総合病院、市立総合病院「脳卒中センター」起工（平成27年4月）。計6病院、29診療所で診療することができる。（平成28年4月1日現在）健康管理：全住民対象のガラスバッジによる個人積算線量測定を実施されている。

全住民対象のWBC放射線内部被ばく検診：市立総合病院、渡辺クリニック（旧渡辺病院）にて実施されている。18歳以下は年2回、19歳以上は年1回の受診可能である。市内小中学校の児童生徒は年2回の集団検診を実施している。

#### ■小高復興デザインセンター

##### ～避難解除とともに始まる小高の復興～

小高復興デザインセンターは、過去の震災による産物であると感じる。その理由は、「人と人とのつながり」によって、阪神淡路大震災や新潟中越地震が復興した実績があったからである。先ほどの「人と人」というのは、住民と住民でもあり、住民と支援者、住民と行政区とも解釈できる。この広域的な意味での「繋がり」や「協力」があってこそ

の復興だ。時代が進むにつれて、いつしか人と人との繋がりが希薄になってしまったと感じる。そんな、いまの時代に欠如しているものが、小高にはあった。その繋がりを復興によって取り戻すべきではないだろうか。

小高区が復興のスローガンとして掲げる、〈実践と探求〉は極めて画期的である。なぜなら、これまでの震災復興は、単に行政が地域を元の状態に戻すものであった。しかし、〈実践と探求〉には、住民と行政区が手を取り合いながら試行錯誤するという実験的な工程があると思う。この二者が歩み寄り、探り探りになるかもしれないが、復興に挑む姿勢がここから見える。

「震災」それは小高区の大きな分岐点になるだろう。小高は「歴史のまち」と言われてきたが、震災も小高の歴史の一部になってしまった。私たちには計り知れないようなつらい思いが、住民にはあるだろう。小高にはこれまでの歴史と共に紡いできた人と人との繋がりがあつた。ほつれかけそうな繋がりを紡ぎ再び結び直していこう。

#### ■おわりに

小高区復興の目標は帰還する人数ではなく、様々な人から選ばれるまち、「小高」である。住みたいまちとは、住みやすさ、将来性、魅力があると考えられる。小高区は中心部に商店街が密集していることに住みやすさがあり、まちに点々と佇む歴史的建造物に魅力がある。けれども、まちに人が充分に戻ってきていない今のままの小高は、将来性に欠けると考えた。

小高を震災前のように、住みたいまちにするためには、少なからず変化が必要であると考えられる。しかし、その変化の中で小高の魅力である歴史的建造物が、淘汰される事はあってはならない。小高のアイデンティティを生かす復興を試みるべきであろう。

